西北地区統合校開設準備委員会（第２回）概要

日時：令和元年７月２２日（月）
１３：３０～１５：３０
場所：プラザマリュウ五所川原　１階　アリシア

＜出席者＞
〇委員
福原　直樹 委員、平川　昌史 委員、隅田　佳文 委員、幸山　勉 委員、
尾野　勝 委員、藤田　重彦 委員、阿部　広悦 委員、長尾　孝紀 委員、
永澤　正己 委員、佐井　憲男 委員
〇オブザーバー
県立金木高等学校
加藤　聖子 教頭、佐藤　泉 事務長、今　譲 教務主任
県立板柳高等学校
中畑　要 教頭、山本　美千代 事務長、東海　賢治 教務主任
県立鶴田高等学校
川嶋　幹二 教頭、外﨑　和子 事務長、山内　拓雄 教務主任
県立五所川原工業高等学校
津島　節 教頭、橘　壽雄 事務長、工藤　和樹 教務主任

１　開会

２　事務局説明

（１）第１回西北地区統合校開設準備委員会における主な意見

■　事務局から資料１により第１回西北地区統合校開設準備委員会における主な意見について説明した。

３　意見交換

（１）校名案の方向性について

①各委員からの校名案候補の提案について

■　委員長から事務局に対し、校名案の方向性の検討の進め方等について説明を求め、事務局から資料２、３により、校名案候補の検討の流れ及び検討の進め方、全国の普通科設置校と工業科設置校の主な統合事例について説明した。

■　委員から次のような意見があった。

〇　新設される統合校の学科構成は、機械科、電子機械科、電気科、普通科の４学科となる。このことを考慮し、「五所川原工科高等学校」と「五所川原工学院高等学校」の２案を提案した。しかし、他の委員は１案のみ提案していることから、自分の案は「五所川原工科高等学校」としたい。

■　委員長から、資料２にあるＮｏ２の校名案候補を「五所川原工科高等学校」とする旨確認し、委員から了解された。

②意見募集の進め方について

■　委員長から事務局に対し、意見募集の進め方について説明を求め、事務局から、青森県立高等学校教育改革推進計画基本方針（案）や第１期実施計画（案）等に対する意見募集の方法に倣うこととし、具体的には、「募集期間は１か月程度とすること」、「募集資格は特に制限を設けないこと」、「郵便、ＦＡＸ及び県教育委員会ホームページに開設するＷＥＢ入力フォームで受け付けること」を想定していることを説明した。

■　委員から次のような意見があった。

○　県教育委員会ホームページ等で意見募集するとの説明があったが、これまで五所川原市でもパブリック・コメントを実施しているものの、意外と提出される意見は少ない。このことも考慮し、現在、各統合対象校に在籍している生徒の保護者等の意見を大事にするなどの配慮をしてはどうか。例えば、学校を通して在籍生徒の保護者の意見を聴取すること等はできないか。
　意見がほとんどない状態で次回の開設準備委員会を開くよりも、統合対象校の生徒の保護者等の意見を広く吸い上げられると良いと考える。
→（事務局）今回いただいた意見も踏まえて詳細を検討したい。

■　委員長から委員である各校の校長に対し、意見募集について各校の教員や保護者に周知し、意見を提出してもらえるような取組をするよう指示があった。

■　委員長から、校名案候補に対する意見募集の実施に当たり、詳細については委員長・副委員長に一任する旨確認し、委員から了解された。

■　委員長から事務局に対し、意見募集の実施に当たっては、各委員にも詳細を周知するよう指示があった。また、意見募集結果の取扱いについて説明を求め、事務局から「意見募集結果は、次回の開設準備委員会において校名案候補を絞り込む際の参考資料として活用するものであり、事前に各委員に送付すること」、「県民からの意見の多寡等により校名案として採用されるかどうかが決定されるものではないこと」を説明した。

③校名案候補の絞り込み方法について

■　委員長から事務局に対し、校名案候補の絞り込み方法について説明を求め、事務局から資料４により「委員からの提案を基に協議により絞り込む方法」、「委員の投票により絞り込む方法」及び「グループ分けしてから協議等により絞り込む方法」の３つの方法について説明した。

■　委員から次のような意見があった。

○　先ほど、委員長からは校名案候補を３～５案に絞るという説明があった一方、この場面では、校名案候補を３案に絞ると説明されているがどういうことか。４案でも５案でも良いのではないか。

→（事務局）現在、各委員から全部で１０案の校名案候補の提案があり、最終的には県教育委員会が１つの校名案を決定することとなる。

　開設準備委員会としての校名案候補は複数あっても良いと考えているものの、最初から５案への絞り込みを目指すと７案でも良いとなりかねないことを考慮し、可能であれば３案への絞り込みを目指していただきたいと考えている。

○　絞り込みの結果は、３案にこだわらず、４案でも２案でも良いのではないかと思い発言させていただいた。

■　委員長から各委員に対し、事務局が示した３つの絞り込み方法以外に考えられる方法があるか確認したところ、次のような意見があった。

○　先日、本校後援会及び同窓会の会員と会議を行ったところ、様々な方から意見を聞いた上で検討するために、これから高校に入学する子どもたちの意見を募集してはどうかとの意見があり、良い意見だと思った。

　今回、開設準備委員会の委員となったことから、私の意見で校名案候補を提案した。このままでは現在の１０案の校名案候補の中から３案程度に絞り込むこととなるが、これから高校に入学する子どもたちやその保護者等の地域の方々から校名案候補を提案してもらい、その中から絞り込む方法が良いのではないか。

○　その思いはよく分かるが、前回の開設準備委員会において、まず、各委員が校名案候補を提案し、その校名案候補についてホームページ上で意見を募った上で、開設準備委員会において絞り込みをしていくこととなった。

　今、提案があった校名案候補の検討方法については、広く校名案候補を県民から伺うものであり、手順として異なると思う。申し訳ないが、開設準備委員会の大きな流れということで御理解いただきたい。

　今回の意見募集においても、これから高校に入学する子どもたちや保護者の意見も吸い上げられるよう、各委員が広く意見の提出を呼び掛けられると良いのではないか。

○　資料４では、３案程度に絞り込むということだが、結局いくつの案に絞り込むのかをはっきりしなければ、グループ分けもできないのではないか。

→（事務局）３案に絞り込むことを基本とし、協議の結果として４案や５案になることはあり得ると考えている。しかし、最初から５案に絞り込むことを目指すと、６案や７案になることも想定される。このことを踏まえ、現段階では、

目安として３案へ絞り込むこととし、どうしても絞り込むことができない場合には４案等としたい。
　絞り込み方法のうち「グループ分けしてから協議等により絞り込む方法」について、３つのグループに分類する例を示しているが、これはあくまで例示である。委員の協議により４つのグループ分けが良いとなれば、校名案候補を４案に絞り込むということもあり得る。

○　各委員から提案された校名案候補と理由を読み込んでいくと、４つのグループ分けということも考えられる。
　例えば、五所川原工業高等学校については、既存の校名である。このことから、「既存の校名グループ」として五所川原工業高等学校、「学科構成に着目したグループ」として五所川原工科高等学校、五所川原実業高等学校、五所川原総合高等学校、「位置に着目したグループ」として北五中央高等学校、五所川原南高等学校、津軽中央高等学校、「理念に着目したグループ」として五所川原志学館高等学校、五所川原統合高等学校、地域創生高等学校というグループ分けを考えてみたがどうか。
→（事務局）繰り返しになるが、資料４において示しているグループ分けについては、あくまで例示である。開設準備委員会の中でグループ分けの数を含めて決めていただければ良い。

■　委員の多数決により、校名案候補を絞り込む方法については、「グループ分けしてから協議等により絞り込む方法」に決定した。

■　委員長から各委員に対し、事務局が示したグループ分けの例で良いか確認したところ、次のような意見があった。

○　先ほど申し上げたとおりだが、事務局が示した例では、位置、専門学科、理念が着眼点となっている。しかし、専門学科に対して普通科という着眼点も出てくる。また、事務局が示した例には、既存の校名という着眼点もない。このことから、着眼点を、位置、学科構成、理念、既存の校名とし、４つのグループに分類することを提案したい。

○　前回の開設準備委員会でも意見があったが、五所川原工業高校に関わってきた方々の同校に対する思いや歴史がある一方で、金木高校、鶴田高校、板柳高校に関わってきた方々は新しい気持ちで統合を迎えたいとの思いがある。
　先ほど委員から提案があったグループ分けでは、五所川原工業高等学校という校名案候補が特別な扱いになってしまう。様々な意見はあると思うが、個人的には事務局が示した例が絞り込みやすいと考える。

○　令和３年度の統合に当たり、板柳高校、金木高校、鶴田高校、五所川原工業高校の生徒が一緒になるのではなく、同年度の２、３年生は各校で教育活動を

展開し、板柳高校、金木高校、鶴田高校はこれまでの教育活動を継続していくこととなる。

一方で、五所川原工業高校には１年生が統合校の生徒として入学してくる。その段階で校長が２人存在し、学校の経営方針が２つ存在すれば良いのかもしれないが、第１期実施計画では、五所川原工業高校の校舎を使用することとなっており、校長は統合校を兼任することとなると思われる。

このため、教育活動全てにおいて、２つの学校が一緒に活動していく状態が２年間続くこととなる。統合を成功させるか否かは、統合校開校から最初の１、２年が勝負であると思っている。どのような学校にするのか、普通科でどのような人財を育成するのかについては、もう少し広く考えて良いと思う。

このような意味で五所川原工業高等学校という選択肢もあると考えた。私個人としては、校名を変更するという前提で校名案候補を提案させていただいたが、別の委員から五所川原工業高等学校という校名案候補が提案されたため、このように考えた次第である。

○　個人的には、資料４に記載されているグループ分けの例については、理に適っている印象を受けた。校名案候補の絞り込み方法を白紙の状態で考えてみた際、何らかの観点に着目して絞り込みを進めることになるだろうと想定していた。個人的には事務局の例示にある３つで良いと思う。

○　私も資料４の３つのグループ分けで良いと思う。

■　委員の多数決により、グループ分けについては、資料４記載の例示どおりに決定したが、委員から次のような意見があった。

○　このようなことを多数決で決めるのは、影響が大きいのではないかということを意見として言っておきたい。

○　資料４に記載されている各グループから１つずつ校名案候補を選ぶことになるのか。

→（事務局）只今、校名案候補を３つのグループに分けて検討を進めることとなったが、次回の開設準備委員会において目指すところとしては、各グループから１つの校名案候補を選んでいただくことを想定している。

■　委員長から、各グループから１つの校名案候補を選ぶことを基本としつつも、協議の状況によっては２つ以上となることもあり得ることとし、次回委員会で協議する旨確認し、委員から了解された。

（２）特色ある教育活動の方向性について

■　委員長から事務局に対し、特色ある教育活動の方向性に係る意見交換の進め方等について説明を求め、事務局から資料５により「西北地区統合校に引き継

ぐべき特色ある教育活動」及び「西北地区統合校の新たな特色ある教育活動」の２つの論点で意見交換する旨を説明した。

①西北地区統合校に引き継ぐべき特色ある教育活動

■　委員長から委員である各校の校長に対し、各校から提案のあった「西北地区統合校に引き継ぐべき特色ある教育活動」について資料５により説明を求めた。

〇金木高校（福原委員）１つ目は、総合的な探究の時間において、それぞれの地域から進学する生徒が自身の郷土を知る活動を行うということである。

２つ目は、地域に貢献するボランティア活動と記載しているが、本校はボランティア活動が非常に盛んであり、地域の園児との交流や老人介護施設との交流を行っている。また、地元のＮＰＯ法人かなぎ元気倶楽部の力を借りながら、観光客に対して金木地域のことを更に知ってもらう活動を行うとともに、社会性を身に付けさせるため、土産品としてロールケーキを考案し販売している。このようなボランティア活動を通して地域を知ったり、起業する力を身に付けさせたいと考えている。

〇板柳高校（平川委員）本校では小・中学校との交流活動を行っている。特に、本校生徒が町内の小学校に出向き、小学生に向けて部活動の内容や教育内容を紹介しており、小学生のキャリア教育の１つになっている。

また、小学校、中学校、高校の代表者による募金活動といった異校種の交流をしている。この活動については、小学生や中学生にとってみれば良い経験であり、高校生にとっても自分より若い年代との触れ合いは勉強になる。

新設校として統合校が開校することとなるが、小・中学生に対するＰＲという面からも、このような活動を引き継げると良いのではないか。

〇鶴田高校（隅田委員）１つ目は英語合宿である。これは本校のＡＬＴだけでなく、鶴田中学校のＡＬＴ、鶴田町に派遣されている国際交流員を含む３人のアメリカ人とともに１泊２日の合宿を行うものである。この合宿においては、ＡＬＴや国際交流員に対し、鶴田高校の生徒が英語でプレゼンテーションを行い、英語で質問を受け、英語で答えるといった活動をしている。

２つ目の海外研修旅行については、７日間のうち５泊６日のホームステイを実施している。今年度は、２年生の国際教養コースの生徒が１１名ということで、旅費の面で厳しい部分があるが、フッドリバーバレー高校にバスを出していただけることになっている。また、鶴田町との交流で培われてきた信頼関係に基づく協力を得て、毎年ホームステイを実施できている。統合校においても、様々な学科の生徒に海外でのホームステイを経験させるということを考える際には、これまで築いた関係性は引き継いでも良い財産であると思う。

３つ目のＥｎｇｌｉｓｈ　ｄａｙは、クリスマスに関するプレゼンテーションやクリスマスランチ等を実施するものであり、ＡＬＴと一緒に活動するものである。校内の予選を勝ち抜いた生徒たちによる英語のスピーチと、国際教養コ

ースの生徒たちによる演劇も実施しているが、これらは生徒自身が英語でアウトプットする活動であり、生徒にとってはプラスになるものである。

最後に、鶴高の恩返しプロジェクトについて述べる。現在は、鶴田町に関係するものとして鶴の舞橋写真コンテストに取り組んでいるが、この活動に限ったことではなく、各地域において名所や特産品があると思うので、それらをアピールできるような活動を統合校でも取り組んでいけると良いと考えて提案した。

○五所川原工業高校（幸山副委員長）まず、工業教育に係る取組だが、統合校に設置される機械科、電子機械科、電気科の３学科においては、引き続き取り組んでいくものであると考えている。また、各学科共通の資格等については、普通科生徒による取得も視野に入れられると考えている。

次に、高大連携については、現在本校と協定を交わしている東北職業能力開発大学校青森校と、ものづくりの技術技能の支援を中心に連携している。この連携を深めていくことが生徒のキャリア形成にプラスになると考えている。

異校種交流学習、体験入学、学校公開については、本校での学びがどのようなものか、実際に体験し理解を深めてもらえる絶好の機会であると考えている。

また、地域貢献の取組については、地域イベントやボランティア活動への参加を通して、地域社会とのつながりを実感させる良い機会になっている。

先ほども申し上げたが、令和３年度から学校全体で取り組むものとして考えると、やはり五所川原工業高校の２、３年生と新設校の１年生が同じ校舎で学びを共にするという状況を踏まえた意見が重要であると考えている。

■　他に考えられる教育活動として委員から次のような意見があった。

○　鶴田高校では地元の祭りに参加しているが、各校でも地域の祭りへの参加等に取り組んでいると思う。このような地域への貢献についても考慮してもらえると良い。

②西北地区統合校の新たな特色ある教育活動

■　委員から次のような意見があった。

○　生徒のキャリア形成の視点で東北職業能力開発大学校青森校との連携を継続していくべきであると考えている。同校では、学校内の施設見学と職業適性診断とキャリアプランニングができるキャリア・インサイトを実施している。五所川原工業高校の生徒は、１年生の段階でキャリア・インサイトを体験し、施設見学をした後、継続的に技術技能に係る指導助言をいただいている。これは、普通科生徒にとってもメリットになると考えている。

また、これまでは工業に特化した高大連携を模索してきたが、統合校における工業科と普通科という学科構成を踏まえると、統合後は工業以外の医薬理工系大学との連携も視野に入れるなど、高大連携の可能性が広がると考えられる。

■　委員長から、４校がこれまで行ってきた特色ある教育活動を引き継ぎながら、より充実した教育活動を展開できるよう、当委員会における意見を総合的に勘案しながら、来年度、五所川原工業高校に設置する開設準備室で検討を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（３）普通科と工業科の連携の方向性について

■　委員長から事務局に対し、普通科と工業科の連携の方向性に係る意見交換の進め方等について説明を求め、事務局から資料６により説明した。

■　委員長から委員である各校の校長に対し、各校から提案のあった「普通科と工業科の連携の方向性」について資料６により説明を求めた。

〇金木高校（福原委員）１点目は総合的な探究の時間における連携ということで、１年次に普通科も工業科も共通して総合的な探究の時間に取り組むこととし、学科に関わらず居住地域によりグループ分けをし、当該グループにおいて、自身の居住地域について理解を深め発信するような取組をしてはどうかと考えている。

例えば、本校ではこのような取組に地域人財を招き、こぎん刺しやうんぺい作りに取り組んでいる。また、総合的な探究の時間ではないが、地域の土産品作りにも取り組んでいる。

このような取組をグループごとに行うこととし、工業科の生徒においては、取組の中で得た知識等をインターネットで発信することや、斜陽館への観光客誘致に向け、例えば、太宰治を模した人形やロボットを開発すること等も考えられるのではないか。

もう１点は資格取得や進学講習等における連携である。例えば、本校では、実用英語技能検定等の一般的な普通科で受験できる検定のほか、就職を目指す生徒には、外部講師を招いて危険物取扱者の資格取得に向けた講習も実施している。

統合校においては、普通科が設置されることにより普通科教員の配置が増えるため、実用英語技能検定等の取得に向けた指導が充実する。さらに、工業科の教員がいることで危険物取扱者等の取得に向けた専門的な指導を受けることができる。

また、大学進学を考えると、普通科の生徒が工学部を目指す際、工業科の教員が配置されていることで、より詳細な指導が受けられるのではないか。逆に、工業科の生徒が大学進学を目指す際には、英語や数学等に係る進学講習をきめ細かに実施できると思う。

〇板柳高校（平川委員）普通科と工業科の協働作業と記載しているが、工業科はものづくりの精神を持ち、普通科でも特に本校で就職を目指す生徒等は商業科目を学んでいる。このことから、例えば、工業科の生徒がアクセサリーを製作し、それを普通科の生徒がパッケージデザインや販売等のマーケティングを行

ったり、インターネットを通して情報発信したりするような連携ができないかということである。総合的な探究の時間において実施すると記載したが、教育課程を細かく検討してみないと、双方の学科で総合的な探究の時間を確保できるか分からない部分はある。仮に、単発的であっても、文化祭等の学校行事の際、このようなことに取り組むなども考えられる。

双方の学科の理念を取り入れた連携ができないかということを考え、提案させていただいたものである。

○鶴田高校（隅田委員）１つ目は、教育課程の編成である。本校、金木高校、板柳高校は普通科の高校であるが、就職を志望して商業に関する資格取得に励む生徒が一定数いると思う。統合校の普通科に入学する生徒においても、このようなニーズはあるだろう。統合校では、普通科の生徒が商業に関する資格取得を目指すだけでなく、工業科の科目も選択できるような教育課程を編成してはどうかと考えている。工業の素養を備え、かつ商業に関する資格を取得している人財の輩出は、統合校の特色になり得ると考える。

２つ目として、進学指導体制の整備を挙げさせていただいた。本校でもそうだが、統合校の普通科においても進学を第１志望とする生徒がいると思うので、進学講習や模擬試験等の進学指導体制を整備することが必要だろう。また、このような進学指導体制は、工業科の生徒で進学を希望する生徒への指導にも役立てられると思う。

３つ目は、総合的な探究の時間、あるいは課外活動になるかと思う。本校では、英語合宿、海外研修旅行、Ｅｎｇｌｉｓｈ ｄａｙのほか、鶴高の恩返しプロジェクト等の活動があるが、各地域の活動に普通科と工業科の生徒が手を取り合って取り組むことで、普通科の生徒だけではできない地域貢献が可能になることもあると思う。双方の学科が協力し地域の活動に取り組むことができれば、これらの活動が実際に社会に出る際の研修の場となり、国際的な視野に立って地域振興を考えられる人財の育成につながるのではないかと思い、提案させていただいた。

○五所川原工業高校（幸山副委員長）資格取得への取組については、先ほど、西北地区統合校に引き継ぐべき特色ある教育活動で述べたとおりである。どのようなことができ、どのようなことができないのかという点については整理していく必要があると考えている。

２つ目は、探究型学習への取組であるが、これは、普通科における総合的な探究の時間をイメージしたものである。工業科の生徒においては、総合的な探究の時間を工業科目である課題研究により代替している。一方で普通科の生徒は、教育課程において総合的な探究の時間に必ず取り組まなければいけないこととなっている。

工業科の課題研究をベースにしつつ、伝統文化の継承、国際交流、地域課題の解決等をテーマにした探究型学習のプログラムを開発する必要があると考えている。具体的なイメージとしては、各地域が抱える課題について、自治体職

員にゲストティーチャーとして講義してもらい、生徒は自身の居住する地域における課題について具体的に研究し、将来的な課題解決にまで発展させていくことが考えられる。

最後に、工業科と普通科の新カリキュラムとあるが、これからの時代を生き抜いていける人財を育むということを念頭に、文理類型にこだわらない科目履修ができるカリキュラムの編成は理想的であると思う。しかし、カリキュラムマネジメントを検討したときに、机上では整理し切れたものであっても、実践に当たっては、ヒト、モノ、カネの要素をどれだけ整えられるかという点が課題になると考えている。

工業の専門学科と普通科の連携によるメリットを最大限に生かした教育活動については、単に科学技術やＩＴ技術に長けた人財を育てるという視点でなく、しっかりとした学力を身に付けさせ、広く深い思考ができる人財を育成するという視点が重要であると思っている。

■　委員長から、当委員会からの意見を踏まえ統合校において普通科と工業科の連携した取組が活発に行われるよう、開設準備室において具体的な検討を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（４）部活動の方向性について

■　委員長から事務局に対し、欠席した委員から事前に提出された意見について説明を求め、事務局から「部活動については、生徒の関心が高い部分である。したがって統合対象４校の生徒からアンケートを取るのも１つの方法ではないか。また、担当者の確保も十分検討する必要があるのでないか。」との意見を説明した。

■　委員から次のような意見があった。

○　統合校が開校し１年生が入学しても、２、３年生は五所川原工業高校の生徒が在籍することとなるため、必然的に五所川原工業高校に設置されている部活動が基本となることは理解できる。ただし、普通科が設置されることで、現在の五所川原工業高校よりも女子生徒が増えることが予想されるため、女子生徒の活動の場を是非検討していただきたい。

○　金木高校における特徴的な部活動として三味線部がある。旧金木町は津軽三味線発祥の地とも言われており、６月１９日の太宰治生誕祭に当たっては、金木小学校の三味線部の児童が演奏してくれた。また、金木中学校においても津軽三味線に関する教育を行っている。

現状の三味線部員は少ないものの、金木高校の三味線部に在籍した生徒は圧倒的に女子が多く、統合校には金木地域の生徒も進学すると思われる。このことから、統合校において生徒のニーズがあれば三味線部の設置も検討いただけると幸いである。

○　統合校が開校する令和３年度と令和４年度の２年間は、五所川原工業高校の生徒と統合校の生徒が１つの校舎に共存することとなるため、統合校が開校した際、部活動のチーム名はどうなるのか、ユニフォームはどうするのかといったことが検討課題となっている。また、このことは学校予算の負担や保護者負担を伴う可能性がある。

　このようなことを踏まえながら、部活動の在り方等を検討していく必要があり、検討課題ということで開設準備室に引き継いでいくことになると思う。

■　委員長から、部活動については部活動の設置数が多い五所川原工業高校を基本としつつも、女子生徒の活動の場の確保や生徒のニーズも踏まえながら、統合対象校で行われてきた特色ある部活動を生かしていくという観点で検討を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（５）統合対象校間の連携の方向性について

■　委員から次のような意見があった。

○　現在、鶴田高校のバスケットボール部は、金木高校と合同チームを編成し活動している。今後、在籍生徒が更に減少していくため、統合対象校間における合同チームの編成等の連携が必要になってくる。あるいは、統合対象校だけでは人数が足りなくなることも予想され、更に範囲を広げた連携もあり得ると思われる。部活動における合同チームの編成は、早急に対処すべき課題である。

○　統合対象校における閉校までの連携の仕方として、各統合対象校間で生徒が交流し互いの学校を理解したり、自身の学校を紹介したりする場があっても良いと思う。ただし、各校は自校の教育活動で忙しいこと、また、金木高校、板柳高校、鶴田高校は在籍生徒が減少していくことを踏まえ、無理のない範囲で活動できると良いと思う。具体的には、各統合対象校の文化祭を各校の生徒が見学し、互いの学校を紹介し理解するような活動ができると良いのではないか。

○　統合校が開校し各統合対象校が閉校となるまでの期間は限られているものの、今後、統合校の開校という観点だけではなく、統合対象校の閉校もイメージしながら、協議していく必要があるだろう。

　様々な教育課題は考えられるが、必要に応じて、その都度ワーキンググループを立ち上げるなどして詳細に検討していかなければならないと考えている。

■　委員長から、統合前であっても４校の生徒が文化祭や体育祭等を通して交流したり、教育課程編成に向けた課題の洗出し等の統合準備が円滑に進むよう、必要に応じて４校の教員によるワーキンググループを設置したりするなど、連携を深めていく旨確認し、委員から了解された。

（６）その他

■　委員から次のような意見があった。

○　各委員の意見を聞いて、自身の考え方が間違っているような気がしたため確認したい。西北地区統合校が開校してから２年間、金木高校、板柳高校、鶴田高校は統合校の分校になるわけではないという理解で良いか。

それぞれが分校になるのであれば、統合校に金木高校の三味線や、鶴田高校の英語学習等を取り入れることは理解できる。しかし、今回、統合校に入学する生徒は、統合対象校と完全に分離されるということで良いか。

例えば、各統合対象校が分校にならないのであれば、金木高校、板柳高校、鶴田高校に在籍する生徒を合わせても部活動の大会に出場できない場合であっても、部員数を確保できている五所川原工業高校や統合校と合同チームを編成することはできないのではないか。

今回の計画における統合の考え方として、統合対象校と分離する形で統合校を新設するのであれば、統合対象校の思いを継承しながらも、新しい校風を作っていかなければいけないのではないか。

○　部活動における大会参加については、高体連に確認する必要があるが、統合後、板柳高校等の２、３年生と五所川原工業高校の生徒が合同チームを編成することはできる。ただし、部員数の多いチームと少ないチームの合同チームでは、選手の出場機会等の面で課題があるため、部員数の少ないチーム同士で編成することが多いと思う。

○　統合校の生徒は、金木高校、板柳高校、鶴田高校と関係が切り離された状態で入学することになるのではないのか。

○　そのような考え方もあるが、統合校を新設する際には、これまで統合対象校が取り組んできた良いものを引き継いでいこうという考え方である。

○　そうであれば、統合校の教育課程は非常に重要になってくるのではないか。簡単に引き継いでほしいと言ってもうまくいかないのではないか。統合校に入学する生徒のことを考えて慎重に検討する必要があると思う。新しい校風をつくっていかなければいけない。

○　それが重要であると思う。それぞれの地域や学校で取り組まれてきたことを尊重しながらも、統合校で何をやるべきかを検討しなければいけない。全ての取組を引き継ぐことは難しく、引き継ぐことができないものも出てくるだろう。

また、統合校が開校した際、五所川原工業高校の２、３年生は在学している。このような中であっても、自分は統合校の生徒だから先輩はいないとはならない。やはり同じ校舎にいる以上、先輩、後輩の関係性は築かれ、先輩から後輩へ様々な指導をするだろう。

このような状況の中での教育については、各地域の伝統を大事にしながらも、引き続き統合校で取り組むことができるかどうか検討する必要がある。これは五所川原市の行政にも関わる問題である。統合校の教育活動については、地元である五所川原市の協力を得ながら進める必要がある。

○　普通科が新しく設置されることを踏まえ、開校前の来年度、慎重に検討する必要があるだろう。統合校に配置される教員も真剣に考えていく必要があると思う。

○　工業科についても考えていかなければいけない。

○　工業科についてもそうだが、普通科は金木高校、板柳高校、鶴田高校の３校にも関わる問題である。

○　これまでの高校教育改革においては、一方の高校に統合するという手法を採っていたが、今回の計画では、統合校を新設するという手法による難しさがある。また、統合校が開校した後であっても、統合対象校には引き続き生徒が在籍し教育活動を実施する必要があり、同時に、統合対象校が果たしてきた役割や特色ある教育活動をどのように統合校に引き継ぐかということも考えなければいけない。

このため、委員による更なる知恵の出し合いが必要であり、実際の学校づくりに当たっては、事務局や統合対象校の校長の役割が非常に大きいと思う。

■　委員長からオブザーバーに対し、第３回委員会の開催に向けて、校訓、校章、校歌、制服などの資料作成に協力を求めた。

４　閉会